

かぞく  
家族とのさい会第2章  
1

しんさいがあつた時間は、多くの学校ではちょうど下校の時間でした。まだ教室にいる人や、校庭にいる人、通学路を歩いている人など、いろいろでした。家族といっしょだった人は少なかったの

です。家族と会えるまで、長い時間ひなんじよでまっている人がたくさんいました。

ぶじでよかつた

ぼくが友だちと校門を出ようとしたときでした。ゴーっとものすごい音がして、ぐらぐらつと強くゆれました。

「地しんだあー！地しんだあー！」

という声が聞こえました。先生たちが、

「校ていのまん中に、あつまりなさいい。」

とさけんでいました。ぼくたちは、いそいで校ていのまん中に走りまわりました。心ぞうがどきどきして、いきが止まりそうでした。

ほかの人もみんなあつまってきました。立っていると、たおれそうになるほどゆれていました。先生につかまって、なっている人もいました。むこうの田んぼで、しゃがんでいる人が見えました。でんしんばしらがぐらぐらゆれて、たおれそうになっていました。プールの水がバシャーンと、校ていにあふれてきました。

ドドドドドドドドドドと音をたてて、長い間ゆれていました。ぼくは、

（こんなすごい地しんははじめてだ。）

と、思いました。地しんがおさまると、先生から、

「クラスごとにらびなさい。」

と言われました。ぼくのクラスは、十人ぐらいならんでいました。なっている子もいました。

雪がふってきました。ぼくは、どんどん心ばいになって、

（どうさんやかあさんはだいじょうぶかな。ばあちゃんは・・・）

と思ひ、なみだが出そうになりました。そのとき、

「しゅんたあー、しゅんたあー！」

という声が聞こえました。ばあちゃんでした。ぼくは、

「ばあちゃんー！」

と手をあげました。ばあちゃんはぼくを見つけると、走ってきて、

「ぶじでよかつた。」

とだきしめてくれました。

ばあちゃんは、かっぱうぎをきて、おたまをもっていました。

ぼくは、なみだがあふれてきました。

このときの気もちは、今でもわすれられません。

ばあちゃんと家に帰ると、家の中は、たんすやたながたおれてぐちゃぐちゃになつていて、歩くところがありませんでした。

「ばあちゃん、家はどうなるの。」

と聞くと、

「いのちがたすかつたんだから、あとはなんとかなるさ。」

といつて、ぼくの頭をなでてくれました。

夜になって、とうさんとかあさんが、ぶじに帰ってきました。すごいうれしかったです。ぼくは、いのちが一番大切なんだな、と思ひました。

